

令和6年度 山形県立山形西高等学校 学校評価書

【評価基準】 A：達成できた B：ほぼ達成できた C：あまり達成できなかった D：達成できなかった

重点目標および取り組み		評価の指標	対応	達成状況	達成度	課題と今後の対応
1 地域に開かれた、信頼される学校づくりに努める。						
(1)	学校の取り組みや生徒の活動を広く発信する。	PTA活動や各種活動の出席率を70%以上にする。	PTA評議員の協力を仰ぎ、目標達成を目指す。	PTA事業の出席率は、PTA総会53%、東北高P連山形大会85%(文教部・総務部)、挨拶運動・交通安全指導90%であった。	B	引き続きPTAからの協力をいただきながら出席率向上に努める。
		オープンスクールの内容を関係者に周知し、例年通りの参加者数を維持できるよう工夫する。	有志生徒を中心に実行委員会を組織して準備・運営を行い、魅力ある説明会を開催する。	学校見学会(6月に実施)を含め、オープンスクール(10月に実施)については十分な成果が上げられた。実行委員の生徒が発案豊かに、学校の顔として責任ある活躍してくれた。参加者アンケートでは、在校生から直接話を聞く機会があったことへの評価が高かった。	A	生徒実行委員を運営の中心にし、本校の魅力をより多く伝えられるようにする。参加者アンケートの結果をもとに改善点について検討する。
		ホームページを積極的に更新して、生徒の校内外の諸活動を広く地域に発信する。	タイムリーな発信ができるように、年次・課・部活動顧問と連携を密にする。	ホームページの他、学校連絡用アプリ(さくら連絡網)も活用して、各年次、各課、各部からタイムリーに情報を発信した。学校評価アンケートにおいて、約83%の保護者等から「概ね良い」の評価をいただいた。	A	情報発信については、引き続き全職員が協力して取り組む。現在のホームページのレイアウトが実情に対応していない部分があるため、リニューアルを検討する必要がある。また、SNSを活用した情報発信も検討していく。
(2)	高等教育機関や地域社会等と連携・協働した学びを展開する。	探究活動「嚶鳴クリエイティブ・ラボ(OCL)」や「西高理系プロジェクト」を通し協働的で深い学びを目指す。	山形大学、東北芸術工科大学との連携協定を中心に外部資産の活用を推進する。	生徒向けの講演・演習や職員向けのワークショップの開催、探究活動の発表会における助言等で連携協定を活用した。また、生徒の山形大学の理系学部を中心とした大学訪問により、理数系教科への興味関心の喚起と進路意識の醸成を図った。	B	連携協定の更なる活用を検討するとともに、スムーズな連携がとれるような連絡、調整のあり方について引き続き研究する。大学も含め外部機関とのつながりは今後も継続し、生徒の探究的な学びが深まるような支援を継続する。
(3)	生徒・保護者等及び学校評議員等による適切な評価等を基に、学校の取り組みについて積極的に検証と改善を図り、新しい時代に対応した学校づくりに努める。	年2回学校評議員会を開催する。	学校運営の改善事項に迅速に対応する。	学校運営に関し、幅広くご意見をいただいた。	B	意見等を校内で共有し、学校運営の改善・充実のために生かしていく。
		新学習指導要領に基づいた育成したい生徒像を明確にし、学校全体で指導にあたる。	前年度の学校評価をもとに、学校の取り組みを見直し、より良い学校づくりに努める。	教育課程の見直しに関する議論を重ねる中で、職員間で育成したい生徒像を共有し、生徒の指導にあたることができた。	B	学校評価等の結果を参考に、今後も本校のスクール・ポリシーに基づいた学校運営を推進していく。
2 授業改善と確かな学力の育成に努め、本校教育の質的向上を図る。						
(1)	本校教育の基本は質の高い授業の実践である。あらゆる機会を捉えて授業改善と教材の精選に努め、確かな学力を育成する。	年間を通じ、学習評価を念頭に、主体的・対話的な授業の実践に努める。授業改善や探究型学習の推進を図る。	研究授業を実施し、職員相互の授業見学を推進する。	職員相互の授業見学や校内外での研修会への参加などを通して授業改善に取り組んだ。	B	今後も研修への積極的参加を促し、その成果を校内で活用していく。
		探究活動「嚶鳴クリエイティブ・ラボ(OCL)」の充実に向け、持続可能な未来を創造するために必要な資質・能力を育成する。	全職員がOCLの目標や指導計画を理解して指導できる体制を整備し、生徒の深い学びにつながるよう努める。	森田智幸准教授を招き、授業参観WEEKとリンクさせ職員研修会を実施し、授業改善に向け様々な有益な情報を職員間で共有した。	A	職員研修会は、普段の授業を振り返りつつ、これからの授業を考える機会として十分機能しているため、今後も継続していく。
		授業におけるICT等の活用を進め、効果的・効率的な授業の実践に努める。	ICTを用いた授業展開についての研修会や研究授業を行う。	多くの授業でICT機器を活用している。	B	授業等における生徒用一人一台端末の効果的な活用事例を職員間で共有するなどして、さらに活用していく。学校予算で購入したICT機器については、計画的に更新できるように検討する。
(2)	教科会を通して本校の教科指導のあり方を実践的に研究する。	教科会において、実践内容を共有し全体で指導にあたる体制を目指す。	授業評価アンケートの結果を教科内で共有、分析する。	授業評価アンケートの内容を授業に生かすことができた。	B	引き続き、教科指導について教科担当者間で情報共有を図る。また、学校全体の学習指導力の向上に努める。
(3)	本や新聞に親しむことを通して、幅の広い学力教養と豊かな人格の形成に努める。	年間一人10冊以上の読書を奨励する。	図書委員会の活動を支援しながら、生徒の図書館利用と読書意欲を喚起する。	読書の奨励がやや不十分であったが、図書委員会の地道な活動もあり、学校図書館の利用者・来館者数は増加した。	B	今後も読書活動の推進を継続していく。図書貸出の増加につながる工夫を考えていきたい。
		社会問題に関心をもち、学習と結びつける姿勢を育てる。	一学級一新聞を活用し、新聞を読む習慣を身に付けさせる。	各年次が新聞を読むきっかけづくりを提供しているが、新聞を活用する習慣化には至っていない。進路指導や総合的な探究の時間の資料としての活用方法は定着している。	B	これまでの活用を継続しながらも、新聞を情報源の一つと位置付けて、図書館資料や一人一台端末等と合わせた効果的な活用を促す。
3 本校に対する社会的な期待と信頼に応え、伝統ある県内有数の進学校として進路指導の充実を図る。						
(1)	時代の変化を的確に捉え、一人ひとりの人生を豊かにする学力と、自らの手で未来を創造しようとする精神を持ち、持続可能でウェルビーイングな社会の実現に寄与する人材を育成する。	最新のセミナーや研究会などを紹介し、1,2年次生の参加を促す。	関係各所と連携し、生徒が参加しやすい環境を整える。	セミナー等を適時、適切に生徒に紹介し、生徒も積極的に参加した。学校評価アンケートでは、90.7%の生徒は、参加募集の案内が十分に行われていると回答している。	A	セミナー等の参加者・人数を集約し、担当課(進路指導課)と各年次との連携・共有を更に密にし、指導に生かしていく。
(2)	進路講演会や教養講演会など世界の平和や多様な文化、人間の生き方等について学ぶ機会を積極的に提供し、ウェルビーイングの視点で未来の社会と自らの生き方考えるキャリア教育の充実を進める。	生徒向けの進路講演会について70%以上の高評価を得る。	Google Formを利用して進路講演会後すぐに評価アンケートを実施する。	どの進路講演会も、「参考になった」「意欲が高まった」と高い評価を得た。	A	今後も、生徒に求められている資質・能力の向上に資する進路講演会となるようにしていく。講演後のアンケートについては、形式をできるだけ統一して、事務処理の効率化を図る。
		教養講演会は、8割以上の生徒が内容に満足するような運営に努める。	講演会終了後、感想文を集約し、自らのキャリアの参考になったかを検証する。	キャリア教育、生き方のアドバイスなど、大変有意義な講演会であった。生徒アンケートの結果ではほぼ100%の生徒が満足していた。	A	次年度も、生徒の視野を広げ、主体的に学ぶ意識の高揚や生徒自身のキャリア(生き方・在り方)を考えることを目的に実施したい。
		グローバルな視点を身に付けるとともに、郷土を愛する心を醸成して国内外で活躍できる人材の育成を目指す。	ユネスコスクールの活動、各種外部イベントへの参加など、国際理解や世界平和、文化の多様性を学ぶ機会を提供する。	6月に「ユネスコスクール・キャンディデイト校」の認定を受け、より充実した活動ができるようになった。担当課(教育デザイン課)と英語科が協力し、海外の高校生との交流を行った。また、1年次生を対象にEU講演会を開催し、国際理解を深めることができた。	A	今後も学校全体の事業と生徒個人の取り組みの両面において、ユネスコの理念に沿った活動が展開できるように情報収集・情報発信に努め、具体的な取り組みを進めていく。
(3)	年間計画に基づいた校内模試や外部模試等の意義と活用の指導を徹底するとともに、その結果について適切な分析と対策に努め、学力の向上を図る。	模試に向けて、「準備⇒自己採点⇒振り返り」のサイクルを確立させ、中期目標シートに模試のCAP(Check:評価、Action:改善、Plan:計画)を記入させる。サイクルを確立できていない生徒への適切な助言を行う。	年次・進路だより等を通して模試の意義を浸透させ、サイクルが確立できているか、自己採点結果をデジタルサービスに入力させ、振り返り状況を把握する。	各模試を通じて、自分の弱点分野を把握させ、振り返りや課題を通して克服できるように支援した。各模試において教科担当者からの学習のアドバイスをとりまとめ年次通信で生徒・保護者等に示した。デジタルサービスを活用した自己採点により、担当職員の集計作業の省力化を図ることができた。	B	学力に応じた支援に加え、模試に取り組む意識の個人差があることから、生徒一人一人への個別支援を充実させる。
(4)	先進校視察や授業力向上教育研究セミナー等に参加し、進路指導や生徒指導、授業力の一層の向上を図る。	オンラインを含む視察やセミナーに参加し共有すべき情報を提供する。	提供された情報について学ぶため、研修会を(紙上・対面を問わず)開催する。	県外の先進校2校の視察を実施した。視察者の報告書により校内で情報を共有した。	B	先進的な取り組みを実践し、成果を出している高校の情報をより広く集める。視察して得た「本校でも実践できること、した方がよいこと」を共有し、実行していく。
(5)	県教育委員会の「社会を生きぬく確かな学力育成事業」等を積極的に活用しながら、山形大学等地元大学への進学を促進するとともに、医学部医学科や東大・京大・東北大をはじめとする難関大学に向かうチャレンジ精神と発展的学力を育成する。	医学部医学科や難関大にチャレンジできる生徒を全生徒の15%程度育成する。難関大志望者集会を実施する。	難関大対策を1年次から充実させる。難関大指導法を蓄積していく。	各年次で対策を進めているが、難関大に挑戦する生徒の育成や指導法の蓄積に課題がある。火曜日の放課後に設定している年次ごとの自主学習会(SCoT)は、授業を補充する取り組みとして成果があった。	B	各年次の成果と課題を共有し、3年間を見通した指導法をさらに研究していく。SCoTの系統的・効果的な活用を検討していく。

重点目標および取り組み	評価の指標	対応	達成状況	達成度	課題と今後の対応
4 豊かな人間性と社会性、コミュニケーション力を育成する					
(1) 18歳で成年になることを踏まえ、保護者等と連携・協力し、挨拶や清掃、マナーや情報モラル等の生活指導の充実を図り、笑顔と知性が輝き、自律性豊かな西高生を育成する。	社会の一員としての自覚と責任、他者との協調性、集団の目標達成に貢献する態度の育成を図る。	役割を分担し、集団の中の自己有用感を向上させる。	日々の学校生活の中で、ほとんどの生徒は他者を尊重し、集団としての目標達成に献身的だった。校友会(生徒会)で決めた服装ルールについて、どのようにして守らせるかという課題に校友会として取り組む必要がある。	B	今後も、生徒一人一人がそれぞれの役割から集団の目標達成のために何ができるか考えることを促していく。また、校友会としての自治活動に対しても適切な支援を行っていく。
	社会的自立に向けたキャリア教育の視点に立つ活動を企画する。	各種活動に見通しを持たせ、また、振り返りを丁寧に行うことによって自己を客観視させる。	各種活動を計画的に取り組めるよう支援した。しかし、深まりのある振り返りまでは至らなかった。	B	生徒の振り返りの時間や場所、方法について実効性を検討する。同時に職員間の反省の共有にも努める。
(2) 校友会活動、学校行事、部活動、ボランティア等生徒の主体的な活動を通して、豊かな人間性と社会性、コミュニケーション力の育成に努める。	校友会活動や部活動等を中心に、生徒の主体的・協働的な活動を支援する。	諸活動について、生徒たち自身が自己決定する機会を多く設ける。	一定数の生徒は主体的に活動する場面はつくれていたのではないかと。特に、学校行事、校友会・部活動等を通して、それぞれの役割について責任をもって取り組む姿が多くみられた。	A	行事の精選も視野に入れながら、生徒が安全・安心に活動していける環境づくりを行う。生徒同士が話し合う場面が少ないため、討論会等、現実的なことで話し合う機会づくりに努める。
	ボランティア等を通じて、自己や社会の在り方について考えを深める。	校友会主催の雪かきボランティアをはじめ、各種ボランティアの情報を生徒たちに伝え、活動を促す。	積極的に外部のボランティアに参加していた。11月末現在で学校を通じて申し込み、活動に参加した生徒は延べ153名であった。	A	ボランティア活動を行った体験等を、生徒同士が共有する方法について検討し、引き続き、ボランティア活動を推奨していく。
(3) 不登校や不適応について適切な対策を講じるとともに特別支援教育の充実を図る。	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導を行う。	生徒・保護者等・職員対象の研修を行う。	1年次、2年次の生徒に対して、スクールカウンセラー講話を実施した。また、PTA総会の後に保護者等に対してスクールカウンセラーから講話を行っていただいた。外部講師(大学教授)を招聘して実施した教員向け研修は面談や相談の新しい手法を学ぶよい機会となった。	B	本校の生徒をよく理解しているスクールカウンセラーによる講話は効果的であり、来年度も計画したい。また、生徒理解・生徒支援のための教員研修は、今後も本校の実態に合った内容を考え外部講師を招き継続して実施していきたい。
	情報を共有し、予防的対策と早期対応に努める。	保護者等と連携を図り、個々の生徒に対しきめ細やかに対応する。生徒のリソースを最大限に生かす。面談前アンケートを活用した面談を重視していく。	生徒対象の面談前アンケートを活用しながら、きめ細やかな面談ができた。保護者等との連携については、学校連絡用アプリ(さくら連絡網)により担任の負担が軽くなった一方で、電話や対面による情報の共有が以前よりも少なくなった。各年次とも、保護者等や外部機関と連携を取り、生徒支援のきめ細やかな対応を行った。	B	オンライン授業や教室に入れない生徒の居場所や対応について、今年度の状況をしっかりと記録・検証し、次年度に向けて体制を整える必要がある。多様な生徒に対応するため、面談前アンケートを活用しながら適切な生徒把握を行う。また、担任・年次・養護教諭・SC・特別支援コーディネーターが連携した支援体制をしっかりと維持する。
(4) 本校の「学校いじめ防止基本方針」に基づき、いじめの未然防止に努める。	いじめの未然防止・早期発見に努める。	年3回(3年次は2回)のアンケートや生徒理解のための多面調査、担任等による面談を行う。	アンケートの実施により、被害者生徒が発信しなくても保護者等からの発信を受け取ることができた。アンケートから把握できた事案については、生徒との丁寧な面談を含めて組織的対応に努めた。	A	いじめの内容が年々幼稚化している。また、自分たちで解決する方法を見つけれない現状があるため、これまで以上に丁寧な対応を心掛ける。
	発生した場合は迅速かつ組織的に対応するとともに、再発防止の措置を講じる。	該当生徒及び保護者等へ速やかに対応し、いじめ防止対策委員会を招集する。	いじめアンケート後、いじめ防止対策委員会を招集し対応した。特に、当該年次と担当課(生徒課)の間で情報共有を適切に行った。1年次生徒を対象とした、警察職員によるSNSについての講演会を実施した。	A	SNSの取り扱いについては、年度の早い時期に生徒向け講演会を開催する方向で検討する。

5 生徒・教職員の心身の健康と安全教育・防災教育を推進する。					
(1) 基本的な人権を尊重し、自分の存在や生き方と同時にあらゆる他者の尊厳を大切にす「いのち」の教育を推進する。	生徒と教職員が、自分と他者がそれぞれに保有する人権について互いに考える場を設けることで、安全・安心な学校づくりを着実に進める。	各種行事や日常の教育活動の中で、自他の「いのち」や人権について考える機会を意識的に設ける。	安全・安心な学校づくりに努めることができた。長期休業前に全生徒に「いのち」の大切さを伝えた(熱中症含め)が、「いのち」や人権について考える場は少なかった。	B	学校教育活動の各活動において、いのちの大切さや人権の尊重について指導していく。特に、ホームルーム活動の中で、いのちや人権について考える機会を設定できないか検討する。
	さまざまな災害に備えた防災教育の充実を図る。	災害に備え、年3回避難訓練を実施する。	避難経路を周知するとともに、防災意識を高める。	毎回目的を変えながら避難訓練を3回実施し、防災意識を高めることができた。	B
(3) 交通安全の意識を高め、生徒・教職員ともに交通事故の絶無に努める。	交通事故発生件数0を目指す。	集会や生活委員会の活動等を通し、生徒の交通規範意識を高める。	全校生を対象とした交通安全講話は短時間での実施となった。自転車の「ながらスマホ」の厳罰化については周知を徹底し、生徒も敏感に対応していた。自転車のヘルメット着用が進まなかったことや自転車事故が皆無とならなかったことは課題である。	B	来年度、外部講師を招いて、交通安全講話を計画し、生徒の交通安全の意識を高めるようにしていきたい。
(4) 不審者から生徒を守るために防犯教育と施設の整備充実を図るとともに、警察や家庭と連携し、適切な情報の共有を行う。	不審者対策を徹底し、生徒の身の安全を第一に図れるようにする。	各種行事の校地内巡視を行う。また、警察や家庭との連携強化を図る。	防犯カメラを活用し、防犯に努めることができた。不審者対策・防犯に関する呼びかけを行ったが、生徒の危機管理意識を十分に高めるには至らなかった。	B	学校外での生活も含めて、日ごろから防犯意識を高め、自分で自分を守る意識を持つように指導を行っていく。
(5) 教育公務員として綱紀の保持と、業務の見直しや校務のDX化促進により学校における教職員のウェルビーイングの向上に努める。	休日の部活動指導について適切な計画を立て、休養が確実に取れるようにする。	各部顧問の理解と協力を得ながら進めていく。	各部署で実施計画を立て、本校の部活動方針を守って実施できた。大会直前の時期以外は、土日どちらかの休日が確保できた。	B	適切な部活動となるように、校友会(生徒会)の体育部委員会・文化部委員会でルールの確認を行うとともに、年度当初に職員間でも本校の部活動方針や活動時間のルール等を確認した上で、適切な部活動の計画を立て指導していく。
(6) 節電やごみ分別等環境問題について生徒の意識を一層高める。	SDGsの理念に結び付けた活動に取り組む。	日常生活において、環境問題を意識して行動する。	探究型学習の発表の際には、SDGsの17の目標を確認させ、持続可能な社会を考える機会にもしている。校内における節電やごみの減量に関しては、生徒がもっと取り組むことが可能である。	B	校友会(生徒会)の保健委員会を中心に、環境問題に対する意識高揚を図る取り組みが実施できるように支援していく。

学校関係者評価委員からいただいた意見等					
<ul style="list-style-type: none"> ・社会問題に関連付けた探究活動は、生徒を大きく成長させ刺激となる。生徒の研究や研究発表会のフィールドを、校内だけに閉じずに外部に広げることが必要である。保護者にも探究活動について関心をもってもらうことも必要である。 ・実社会に即した幅広く深い探究活動の実施には、外部人材の積極的な活用が必要である。地域の企業等で活躍しているOG等による応援団を組織してはどうか。 ・生徒自身で学校をつくりあげていくことは重要である。伝統に縛られることなく、なりたい姿を考えながら、学校をつくるシステムを構築してほしい。 ・新聞はあらゆる分野の情報が網羅され、信頼性の高いメディアである。新聞を読む習慣がない生徒にとって、新聞を活用した学びはますます重要となっている。膨大な情報が存在するインターネット社会で、正しい情報を取捨選択し、情報を読み解く情報活用能力も必要となる。 ・現在の高校生は、コロナ禍において小中学校でマスク生活を強いられたが、制約の多い中でも工夫をしながら学校生活を送ってきた経験がある。そのことを忘れないで、生徒が生き生きと活動ができるような指導を継続していただきたい。 ・模擬試験は、その時点での自分の実力や弱点を把握し、今後の学習に繋げていくことが一番の目的であることは理解できる。ただ、3年次で受験する模試は多いように感じる。その結果、生徒は十分に活用できていないということもあるのではないか。 ・教員の働き方や勤務時間に課題があるのではないかと。職員が子供の体調不良の際に安心して休暇を取得できるなどのワーク・ライフバランスの視点も重要である。 ・今年度は、2回の除雪ボランティアに加え、7月、11月の地域活動「あいらぶ末広楽市楽茶」に、校友会、メディア創生部、書道部、美術部の生徒にボランティアとして参加いただいた。ご協力に感謝したい。 					